Vol.20-2 2012.12.7

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

CONTENTS

スポット 2
ミュージアムの収蔵品54
『平和の泉』

巻頭つれづれ 3
「情報の送り手」と「情報の受け手」
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより 5
外交戦略と民主の願いを結ぶ大学の役割
中国を眺める一大学人の目に引き留めたもの
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館副総長<国際担当>・立命館大学副学長〕

ここが見どころ 7
「見捨てられた人々」と全体主義
―ハンナ・アーレント『全体主義の起源』から
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

8
華道家元池坊×立命館大学国際平和ミュージアム
「平和の祈りを生ける」展
木立 雅朗〔立命館大学文学部教授〕

運営委員リレー連載 9
「生命の原理」から学ぶ
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
早野 俊哉〔立命館大学生命科学部教授〕

ミュージアムおすすめの一冊 11
Hans Belting, Bild-Anthropologie: Entwürfe für eine Bildwissenschaft, Wilhelm Fink Verlag, München, 2001
ハンス・ベルティング 著　仲間裕子 訳『イメージ人類学』（平凡社　2013年刊予定）
ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン著　宮下志朗・森本庸介 訳
『ヴィーナスを開く―裸体、夢、残酷』（白水社　2002年7月刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
仲間 裕子〔立命館大学産業社会学部教授〕

ミニ企画展 12
開催報告（2012年7月～10月）

事業報告 13
- 2012年度　博物館実習受け入れ
- 夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？2012
- 小中学校教員対象下見見学会2012
- インターンシップ受け入れ
- 文字・活字文化の日「平和って　なに色？」

16
- 元アメリカ兵捕虜の見学と交流会
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第５回 広島平和記念資料館
- ボランティアガイド活動日誌
  立命館大学国際平和ミュージアム　ボランティアガイド・平和友の会　伊藤 昭
- 2012年度入館者状況（2012年4月～10月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『平和の泉』

表　紙
縦27cm／横38cm
年代：1949年

ハルノは議会へ訴えます

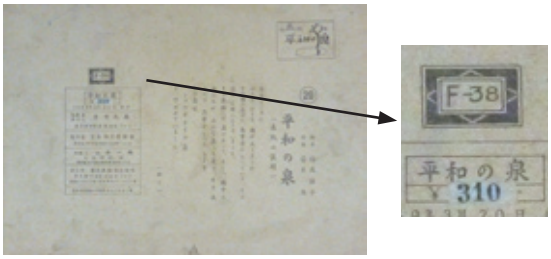
民主主義の下、平和に暮らすという最終場面

日本紙芝居協会製作、国民画劇株式会社発行、作・稲庭桂子、画・安里満。表紙を含め全20枚の印刷紙芝居です。

白地の背景に、森や泉、手足がすっきりと長く、髪も薄茶色の女性などが描かれています。ある小さな国の話とされていますが、女性達はもんぺや着物に割烹着といった服装をしており、示唆するところは一五年戦争当時の日本です。

主人公はハルノという名の若い女性です。ハルノの住む国では、議員達が議会に無関心なため、簡単に戦争がはじまり男性は戦争にとられます。女性たちが泉のほとりで「仕方がない」と嘆いていると嵐がおこります。ハルノは「イクジナシ」という泉の声を聞き、自分達が立ち上がらないから戦争が始まったと悟ります。そして、議会に戦争をやめるよう訴え、戦争をやめて男性達を取り戻し、女性達も政治に参加し、民主主義の下で平和に暮らす、というあらすじです。

奥付には、GHQの検閲のマークもあります。「F－38」は、事前検閲を通過した印で、「F」は国民画劇株式会社に割り振られたものでした。畑中圭一によれば、GHQの検閲目的は「すべてのメディアから軍国主義的、封建的なものを排除すること」と「公共の安寧や占領軍を妨害するような虚偽の報道を阻止すること」でした。紙芝居を映像メディアとして検閲し、内容が歴史的事実に基づいた表現になっているか、反民主的、超国家主義的、軍国主義的な宣伝に使われないかなどを点検していました。



裏（奥付）

脚本の稲庭桂子は、1948年に民主紙芝居人集団を組織し、その後反戦平和の紙芝居を多数作った人物です。1942年に日本教育紙芝居協会に入社して紙芝居製作のキャリアをはじめ、国策紙芝居の脚本を書いていました。兵士と銃後の母の絆を描いた『櫛』は、当時高い評価を得ました。日中戦争中、紙芝居は国策を宣伝するメディアとして着目され、紙芝居製作者達は国策に協力していました。ミュージアムだより19-2で紹介した『宣戦』も、こうした国策紙芝居の一例です。

1945年12月に女性の参政権が認められ、46年には日本国憲法が公布されて男女に平等の権利が認められて日本は民主主義国家となりました。紙芝居は、今度は民主主義による統治の宣伝メディアに姿を変えました。『平和の泉』にGHQの指導等があったかどうかはわかりませんが、前述の『櫛』や「原爆の子」をモチーフにした1952年の『平和のちかい』等の稲庭の代表作に見られる情緒的な作風は、この作品からはあまり見ることができません。

（学芸員　兼清順子）

引用・参考文献

昭和館学芸部 編『昭和の紙芝居：戦中・戦後の娯楽と教育』（2012年、昭和館）
畑中圭一 著「民主主義の推進と紙芝居：GHQの検閲と自主規制」（2011年、『国文学：解釈と鑑賞』Vol.76, no.10: p.127-134）

「情報の送り手」と「情報の受け手」

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長　安斎育郎
（立命館大学名誉教授）

福島の子どもたち

私が太平洋戦争終戦前後の5年ほど福島県二本松で疎開生活をしていたことは、以前の「つれづれ」で紹介したことがあります。二本松は原発の事故現場からは70kmほども離れていますが、風と雨に運ばれて放射能が降ってきました。汚染された校庭の土は削り取られ、8月下旬に訪れた時には、汚染していない土を表面に被せる「埋め戻し」作業の最中でした。まだ、子どもたちが土まみれになって心置きなく校庭で遊べる状況にはありませんが、一抹の不安を心に、子どもたちも親たちも先生方も懸命に生きています。

写真を見て下さい。小林淑人校長先生に案内された音楽室で、30人以上の子どもたちが、若い先生のタクトに合わせて、有名なモーツァルトのセレナーデ「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」をアコーディオンを中心に見事に演奏し切りました。私は「65年前の先輩」として、お礼に手品を演じました。手品は私の趣味で、東京大学奇術愛好会第3代会長でしたし、いまは「国境なき手品師団」の名誉会員でもあります。

二本松南小学校の音楽室で（2012年8月31日）

2012年10月19日には、福島市渡利地区の「さくら保育園」を訪れました。安斎科学・平和事務所の「福島プロジェクト」の一環として、今後1年間、園児や保育者、希望する保護者など約100人の外部被曝線量を測定するための打ち合わせです。「さくら保育園」には、原発事故2ヶ月後から度々訪れ、園庭を除染したり、砂場やプールサイドや木々の放射能汚染をチェックしたり、給食に使う食材の放射能を測る装置の導入を手伝ったりしてきました。やっと今年の運動会は園庭でできましたが、例年なら裸足で演じる「相馬野馬追い」の踊りも靴履き。しかも、園庭に手をついて足を蹴上げる「見せ場」ともいうべき仕草はカットされました。表層土の放射能汚染が心配なのですね。花見山公園を散歩したり、園庭で泥まみれになって遊ぶ自由を奪われ、園舎内で過ごすことが多い子どもたち。「手品のおじさん」を見かけると、人懐こく寄ってきました。この子たちのためにも、より安全な未来を創らなければ―いつもそう感じます。

福島市内のさくら保育園で（2012年10月19日）

放射能から身を守る

保育園のすぐそばで、民家の除染作業が行われていました。市内各地を順番に除染しているのですが、作業が大手業者に丸投げされて地元業者が使われていないことに批判があるようです。作業員が1階の屋根に上がり、高圧洗浄機でジェット水流を噴射し、2階の屋根、雨樋、窓などを除染していました。もちろん、除染といっても、水の勢いで洗い落とされた放射性物質が、上の屋根から下の屋根に落ちるだけだったり、地面に落ちてそこに捕まったり、下水溝に入って流れて行ったりするだけで、消え失せるわけではありません。だから、この種の「除染」は「移染」と表現されることもあります。大事なことは、除染の前後でこの家に住んでいる人の被曝がどれだけ減ったかですが、そのような調査についてはあまり聞いたことがありません。「高圧洗浄機で洗い流したから大丈夫」ということだと、単なる気休めのためにゼネコンに復興対策費を「垂れ流している」ということになりかねません。

福島県での民家の「除染」（2012年10月19日）

原発事故による放射能汚染の主な原因は「セシウム137」という放射性核種ですが、厄介なことに、放射能の強さが10分の1に減るには100年かかります。写真のような「除染」で放射能が消え失せる訳ではないので、「環境中に残されている放射性物質が回り回って食品の汚染に結びついたらどうしよう」という不安に見舞われます。「さくら保育園」は、給食にはとても気を遣っている保育園で、園児に提供する給食の食材の放射能汚染は、保育者にとっても保護者にとっても、重大な関心事でした。園は、写真のような「食品放射能検査機」を導入してフルに活用しており、給食の安全性についての保護者の理解を得る点で大きな役割を果たしています。

さくら保育園が導入した食品放射能検査機（2012年8月20日）

しかし、最終的に心配なのは「人間の体にどれだけ放射性物質が入ったか」、つまり、体内汚染の問題です。どうしても、体の放射能汚染の有無を知りたいという気持ちが残りますので、それに応えるために開発されたのがホールボディ・カウンター（全身放射能計測装置）です。私はかれこれ45年も前からホールボディ・カウンターについての研究・開発に関わってきましたが、いまでは福島県下にかれこれ20台ほども各社のホールボディー・カウンターが導入されています。10月に福島を訪れた時には、福島県労働保健センターでの測定の様子を見る機会がありました。下の写真は、2台のホールボディ・カウンター（キャンベラ社製）で体内汚染を測定しているところです（右の被検者は財団法人ルイ・パストゥール医学研究センターの宇野賀津子さん、左は秘書の島野由利子さん）。ちょっと狭い空間ですが、ここに2分間立っていると、体の前側に装備されている検出器によって体内放射能汚染の程度が測定されます。二人とも、自然放射性核種カリウム40以外には、放射性物質は検出されませんでした。基本的には、「さくら保育園」の食品放射能検出器の親分みたいなものですが、大人と子どもでは体格も違うし、閉所恐怖症の人もいるから遮蔽体で囲い込む訳にもいかないし、測定時間は限られるし、難しい点もいろいろあります。

2分で測る体内放射能（2012年10月19日）

環境省の有識者懇談会に加わって

私は、いま、環境大臣所管の「原子力被災者等の健康についてのコミュニケーションにかかる有識者懇談会」の委員です。10月18日は私の問題提起の番でした。私は、コミュニケーションが成立するためには「情報の送り手」と「情報の受け手」の間の信頼関係が不可欠であることを強調しました。そのためには、「情報の送り手」側は「隠すな、ウソつくな、故意に過小／過大評価するな」の原則を守ることが、そして、「情報の受け手」側は、放射線や放射能についての知識を正確に読み解く「放射線／放射能リテラシー」が必要なのでしょう。ミュージアムは「情報の送り手」としての機能を果たすことが期待されていますが、魅力的な「情報の送り手」であるためには、ミュージアム自身が世界を正確に読み解くリテラシーが不可欠で、読み解いた内容を鮮明な問題意識に沿って整理し、「情報の受け手」に魅力的に伝達する能力を培うことが大切なのだと、自戒する日々です。

外交戦略と民主の願いを結ぶ大学の役割
中国を眺める一大学人の目に引き留めたもの

立命館大学国際平和ミュージアム
館長　モンテ・カセム
（立命館副総長<国際担当>・立命館大学副学長）

一小学生の記憶

「ごはん全部食べないと周恩来が怒るよ！」。ご飯よりおかずを先に食べたがった小学生の私に、母がいつも注意していた。「周恩来」が恐るべきものだと感じて、もう少し正体がわかればと思って母に聞くと、「お父さんに聞きなさい」と返事が戻った。新聞を読んでいる父のそばに行って、「周恩来は恐竜ですか？」と聞いた覚えがある。父の笑いが止まらず「何故こんなことを聞くのか？」と聞かれ、事情を説明したら父の顔が急に真面目になって「周恩来は中国の豪い人だ」と教えてくれた。母の言葉の意味は、この後の話で分かった。

当時、朝鮮戦争の時であり、中国にゴムが英国の旧領土の国々から入って来なくなっていた。英国領土から独立して間もないスリランカが英国政府の要請に耳を傾けず、中国に天然ゴムを売ることにした。中国は必要としていたゴムをスリランカからもらい、そのお返しに食糧不足のスリランカに米を売ってくれた。30年間の貿易協定（Rice-Rubber Pact）で、スリランカのゴムを世界市場の値段より少し高く購入し、米をスリランカに世界相場の値段より少し安く売ってくれた。ちょうどその話を聞く一週間前、私の小学校の校長先生が中国の人口が多くて食糧不足の危機に直面している国だと、歴史の授業で教えていたことを思い出し、「けれども中国も米が足りないと、校長先生が言っていたよ！」と父に言うと、父は「だからこそ、君がご飯一粒も残さず食べるべきだ」と反応が返ってきた。

当時の中国の戦略的外交の偉大さが、小学生の私の頭にもぼやーっと入っていたと思う。だからこそ、この話を2010年春に立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホールで開催した「周恩来と日本、そして京都」写真展（主催：立命館孔子学院）の式典あいさつのなかで紹介した。言うまでもないことですが、今の中国は経済大国になり食糧不足で困っている国ではないのですが、当時の中国外交が食糧不足のスリランカに有利な条件で貿易協定を結んだことは忘れられない。自分の身を削ってでも困っている相手を助けるという立派な心が、永遠にこれからもさらに伸び、中国外交の良心になればと願っていることを式典のあいさつに述べた覚えがある。それを聞いていた中国の若手研究者や中国の報道の方が私のところに来て、「先の話は本当にありがとう。その話を今の中国の若者に聞かせたいね」と言ってくれた。スリランカとの貿易協定に関わって、周恩来首相の偉大さを感じた一小学生の話として語った私こそが、その反応に感心した。

「周恩来と日本、そして京都」写真展での挨拶（2010.3.31）

中国の旅

今考えてみると、スリランカに国際会議所を建設してくれた時も、中国の技師たちや指導者が地元の労働者と肩を並べて働き、彼らのスリランカでの生活も質素だった。この謙虚さも中国外交の重要な側面だと感じた。他者のためになるものを地道にやる。この精神はアフリカの、おそらくタンザニアのことだったと思うのだが、鉄道を内陸から港まで引いてあげた例を思い出す。いま中国の資源外交は、アフリカで大変アグレッシブだという評判もありますが、私から見ると、あまり豊かではないときでさえ、中国は困っている国々に手を差し伸べていた延長で今の中国外交が進化してきている。だからこそ、今日の中国のアフリカでのプレゼンスは目立つと思う。中国の大学にもアフリカから多くの留学生が来ている。先月、中国の出張のときも、そのことは強く印象付けられた。

北京航空航天大学（Beihang University）の60周年記念式典の学生主催の華やかな行事で、中心にいたMC（司会者）3名のうち、一人はアフリカの留学生だった。流調な中国語で観客を笑わせたりしているところ

を見て感心した。キャンパスを歩き回ると、非常に活発に様々な国々の留学生と中国の学生の協働を見て、私もエネルギーをもらった。立命館から出席した4名(一人は中国国籍)の扱いは非常に丁寧で、お会いした方々のなかに来日していた方もいて大変懐かしく思い出話をしてくれた。真夜中に周辺の街を歩いても、治安が良くて安心だった。それを体験した私は、今年中国で起きた反日暴動は何であったかと思った。日本での報道を見ると、中国のどこでも反日感情は強いとの印象は、今回の中国の旅で溶けてしまった。新聞等では尖閣諸島の領土について、中国側の視点を述べていた記事はあったが、それは大衆の怒りに繋がっているように感じなかった。理性のもとで対話を積み重ねていけば、この外交の壁を越えられると思った。

東アジアの安全保障と教育の力

大衆の平和と繁栄の真の願いに耳を傾けていける大国のリーダーたちは、今こそ世の中に必要としているといえる。パレスチナのガザ地区やシリアで起きていることを見ると、本当に無駄に人の命を操っていると感じる。どこか国際外交上で、希望が湧くような話があればと思った。オバマ大統領の再選後、アジア外交のファースト・ストップとしてミャンマーを訪問し、アウンサンスーチーさんとの温かい出会いの報道を見て、心が暖かめられた。だがこれからの話し合いが大切で、道のりは長いかも知れないが根気よく話し合いを続けなければいけない。東アジアの安全保証なくして、アジア太平洋地域の発展はありえない。現在、12月に投票が予定されている、韓国の大統領選挙に出る立候補者の動きが活発になっている。12月の後半になると、日本の政権の行き先もちょっと見えてくる。中国では、新しい指導体制も確立された。これを機会に過激な行動を取りやめ、真剣に日中韓の間の重層的な対話をし、穏やかなWin-Winの解決策を見つけてほしい。

何年か前に同様に竹島・尖閣諸島が原因で、日中韓の間の緊張が高まっていた時期があった。当時、私が所属していた立命館アジア太平洋大学の学生から、あるセミナーの冒頭のあいさつをしてほしいと要請があった。マオリ系のニュージーランド人の先生の指導の下で、ブラジル人の学生の熱意でこのセミナーが企画されていた。領土争いと歴史教科書問題を取り上げ、討論に中国、韓国、台湾と日本の学生諸君が登場した。午前中、それぞれの国の視点からこの問題を取り上げて発表した。午後は、セミナー参加者が一緒になって、解決策を見つけようとしていた。最後の結論の発表において印象的だったのは、対立した意見を持った人々が一緒に知を結集して、解決策を探すプロセスでした。その結果として、「グローバル化された時代に国の領土はどんな意味を持つのか？」。争っている領土について、「共同開発すれば」とか、「歴史は共通であっても解釈は違った場合どうすればよいのか？」歴史教科書を「協働して作成すれば」と、発表した。この様なことを可能にする制度的、組織的環境をどう形成すればよいかと考えさせられました。

大学の中立性を活用し、意見や立場の違う方々をおなじテーブルに呼び寄せることは十分に考えられる。立命館も過去何回か、この役割を果たしたことがある。教育機関同士の交流を通じて、そのほかにも平和構築に役立つことができる。世界中の若者の間で、友情を生み出す環境を形成できる。教育の国際化の重要な目標は未来のリーダーの養成と考えれば、いつか意見が違う国々の間で何かの問題が生じたとき、幼い時の友情を土台にして電話一本で当事者同士が話し合えるプロセスが始まれば、平和構築の貢献ができると考える。

この様な国際的な学術交流に立命館も貢献している。中国との関係でも幾つかの例がある。そのなかで取り上げると、中国の大学づくりの一環として2004年度から８年間にわたって、中国の大学管理運営幹部特別研修を立命館で実施してきた。最初JICA（国際協力機構）・JBIC（国際協力銀行）の国際協力研修でしたが、そのプログラムの期限が過ぎた後も自ら自分の予算を組み立て、中国の大学管理者研修が継続されている。約900人の方々がこの研修プログラムを卒業され、厚い信頼関係を築いていると感じる。今現在も2大学の研修プログラムを実施する予定でいる。しかし尖閣諸島の緊張した外交環境の下で、日本に来る研修生のビザの発行が引っかかっている。研修事業の一つは延期になり、もう一つはビザ申請の発行待ちになっている。私の所見に過ぎないかも知れないが、今の緊張環境と言われている時期こそ、研修プログラムを実施すべきだと思う。先に述べたように、中国と日本との交流に関する心からの願いを叶えることによって、重層的な外交チャンネルを構築することができると思う。政治的に無力の大学であっても、有力な民際外交の担い手になれると自覚してほしい。

※立命館大学国際平和ミュージアム館長・名誉館長の見解「日中の友好関係の発展にむけて」(2012年9月21日）を、発表しました。詳しくは、当館ホームページにてご覧いただけます。

「見捨てられた人々」と全体主義 ―ハンナ・アーレント『全体主義の起源』から

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長　加國尚志
（立命館大学文学部教授）

20世紀の歴史を振り返ると、「全体主義」という政治体制がどうして生じてきたのか、どうしてあのような残虐なことを行なうことができたのか、という疑問が生じます。そして、どうして人々がそのような体制を支持し、独裁者を称賛し、従っていったのか、ということを思わざるをえません。

ハンナ・アーレントは、ユダヤ人の女性哲学者で、ナチスの時代にドイツからアメリカへ亡命しました。戦後もアメリカにとどまり、『全体主義の起源』という大部の著作を公刊し、20世紀最大の政治的問題としての「全体主義」が歴史的にどのように生じてきたのかを明らかにしようとしました。

人種主義や帝国主義、無責任な官僚主義、プロパガンダ、秘密警察、強制収容所など、全体主義を可能にしたさまざまな背景や政策などを彼女は網羅的に分析しました。その中で、彼女が「モッブ」と呼ばれうる人々について言及している点はたいへん興味深いものです。

「モッブ」という言葉をあえて訳せば「乱暴な群衆」ということになるでしょうか。アーレントは、階級社会が解体し、中産階級から脱落することにより、「自分を締出した社会と、自分が代表されていない階級」を憎むような人々として「モッブ」が登場した、と述べています。彼らは、ユダヤ人の社会的影響力を過大に評価し、自分たちが社会的に不遇であるのはユダヤ人の陰謀によるものだ、と信じるようになりました。そもそも社会のアウトサイダーだった彼らが英雄崇拝と極度な行動主義を主張するようになると、政治家たちも彼らを利用するようになり、「モッブ」と「民衆」を同一視するようになっていきます。ニヒリスティックなイデオロギーに彩られ、市民社会を軽蔑する「モッブ」の言動が大衆を引きつけ、「指導者」への崇拝と結びつけられるところに、ヒットラーが登場する地盤があったことをアーレントは冷静に分析しています。

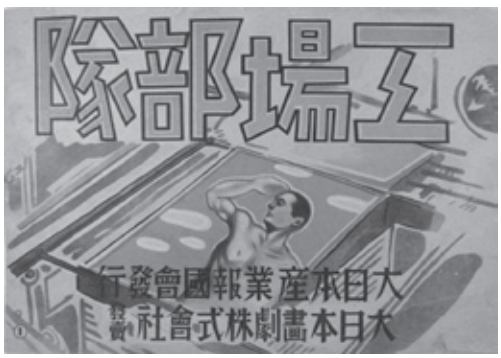
アーレントの分析を要約すれば、このような「モッブ」が、自分のアイデンティティーを消し去るような変化ならどのような変化でも求め、無名性と暴力を欲求し、それに迎合するエリートは歴史の客観性を軽蔑して、歴史の改竄をものともしなくなっていた、という状況がナチス登場の背景にあったと言うことができるでしょう。アーレントは「全体主義運動の魅力は単にスターリンやヒットラーの嘘を吐く名人芸にあったのではなく、彼らが大衆を組織し操作して自分たちの嘘を現実へと変え得たという事実にあった」と述べています。

アーレントは、全体主義の支配が成立したのは、政治的・公的領域を消滅させ、人間関係を破壊し、孤立化した人々を動員するところにあった、と見ています。公共性や複数性の破壊は各人を「見捨てられた」人にしてしまいます。この「見捨てられていること」(Verlassenheit)こそが、全体主義の支配の根本にある、とアーレントは主張しています。

現代の日本は、かつて中産階級と呼ばれた層が崩壊し、格差社会が顕著になってきています。その中で、少なからぬ人々が、自分は中産階級から脱落した、という感情を経験し、安定した生活や市民的な公共性から除け者にされているという思いを持つようになっていないでしょうか。自分たちは社会のどこにも帰属せず、市民的な公共の道徳は偽善的であると考え、変化をもたらしてくれそうな人物を天才的指導者として崇拝する、という、アーレントが「モッブ」と呼んだ人々と共通する感情が広まっているようにも思われます。

いったいなぜ「全体主義」という体制が登場し、人々は独裁者を熱狂的に支持したのか。社会から「見捨てられた」と感じている人々の増大がその背景にあるのだとしたら、「全体主義」は20世紀の歴史のエピソードではなく、現代においてもなお批判的に解決されなくてはならない問題と同じ根を持つものであったということがわかるでしょう。

国際平和ミュージアムで展示している戦時体制における大衆の参加を呼びかけるスローガンやプロパガンダの資料は、ただ国家体制によって上から押しつけられたものとしてではなく、そうした体制を支持する人々の存在があったことも示しています。そのことは、現代の日本社会においても決して清算されていないように思われます。過去の過ちを繰り返さないためには、歴史をただ過去の記録と見るのではなく、私たちの状況がそこに映し出される鏡として見なくてはなりません。



紙芝居『工場部隊』
（1941年　日本産業報国会発行・大日本画劇株式会社発売）

華道家元池坊×立命館大学国際平和ミュージアム「平和の祈りを生ける」

木 立 雅 朗
（立命館大学文学部教授）

「陶器製手榴弾」は1944年～1945年まで作られた武器です。各地の窯元が「本土決戦」を目前にして急造した武器です。萬野翔子氏が卒業論文で扱ってから（本学文学部2004年度卒業）、本格的な考古学的な研究が進みました。その研究が進めば進むほど、1945年当時の人々の命が極めて「軽く」扱われていたことに改めて驚かされました。

平和を訴える教材として陶器製手榴弾を収集・研究されてきた杉浦公昭氏は、2001年に次のような詩を作りました。「わたしは瀬戸物手榴弾　火薬を再びつめないで　生けてください花一輪　人の心が和むよう」。私達はその心を受け継ぎ、展示などでは陶器製手榴弾に花をいけてきました。

その後、文学研究科三枝暁子准教授のもとで、池坊次期家元、池坊由紀氏が学ばれていることを知り、三枝氏を通じて池坊氏に協力を依頼したところ、快くお受け下さりました。むしろ、生け花の原点は神仏への祈りの花であり、その原点に立ち戻るという意味で、積極的なご提案を頂き、本年8月2日～7日に第58回広島平和美術展（広島県民文化センター・地下展示室）、同10月7日～9日に第20回8·15国際平和美術展（東京ドームシティ・プリズムホール）に共同で出品参加しました。本学の研究成果と池坊の平和を願うはじめてのコラボレーションでしたが、池坊由紀氏をはじめとするスタッフの皆さんのご協力を受け、平和を訴える活動の裾野の広がりを心強く感じました。

本学からは京都・美濃で作られた陶器製手榴弾、埼玉県・浅野カーリット工場で廃棄された陶器製手榴弾を展示しました。いけばなとの対比を強めるため、陶器製手榴弾がもつ迫力を押し出し、展示ケース一杯にできるだけ多くの陶器製手榴弾を詰め込みました。言葉で表現できない当時の時代性を映し出そうとしたためです。池坊氏は広島では夾竹桃を、東京ではコスモスを主体とした壮麗な祈りの場を生け花で表現して下さり、両者のコントラストが際立ったと思います。その間には、清水焼の陶器製手榴弾（復原品）に一輪の花が生けられ、双方のコントラストの仲立ちをしました。私達の狙いは、陶器製手榴弾の重苦しい迫力を、祈りの花が打ち消すことでしたが、いけばなの壮麗さと祈りの迫力は想像以上に見事に打ち勝っていたように感じました。むしろ、私達が用意した資料数が足りなかったように感じました。

原爆ドームのほど近くの会場では、ドームの迫力や夾竹桃のたくましさの前に、展示した陶器製手榴弾が「ちっぽけなもの」に見え、心苦しく感じました。しかし、池坊広島支部の皆さんの心温かいご声援と平和を祈る心、そして見学者の方々の関心の高さに救われ、「命の軽さ」を示す資料としては、同じ性質のものに違いないと思い立ちました。また、広島支部の皆さんが長く平和美術展を支えてこられたことを知り、本当に頭が下がりました。東京では若々しい池坊の有志の皆さんの機敏な作業と、広島とは全く雰囲気が違うコスモスの生け花に心を奪われました。広島でも東京でもいける過程を見せて頂きましたが、最後に池坊由紀氏が陶器製手榴弾に野花を生けられる姿に立ち会った時、神々しい儀式の完成を見るような気持になりました。生け花のイロハも知らない門外漢ですが、過程を見せて頂いたからこそ、「心を生けている」と強く感じました。私達の研究や平和運動には無い、異質で「たおやか」な力を感じました。

学生達と研究してきた成果は、知るべき重要なことがらでしたが、決して「喜ばしい事実」ではありませんでした。この事実を明らかにしていきながら、「平和の祈りをいける」ことで、すべてを包み込んで前に進むことができる、そのような力を頂いたような気がします。

最後になりましたが、今回の企画を提案して下さった池坊由紀氏、徳持拓也氏をはじめとする池坊の関係者の皆さんには、本当にお世話になりました。また、本郷真紹氏・三枝暁子氏をはじめとする本学関係者の皆さんにもお世話になりました。記して感謝の意を表します。

広島会場の様子（8/2～7　広島県民文化センター・地下展示室）

東京会場の様子（10/7～9　東京ドームシティ・プリズムホール）

「生命の原理」から学ぶ

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　早野俊哉
（立命館大学生命科学部教授）

はじめに

生命科学と平和との関わりで、誰もが真っ先に思い浮かべるのは細菌やウィルスを用いた生物兵器ではないでしょうか。生物兵器は、ある程度の知識や技術があれば小規模の設備でも製造することができることから「貧者の核兵器」と呼ばれています。1928年に発効した「ジュネーヴ議定書」により、戦争での生物兵器の使用が禁止され、1972年にはその開発、生産、保有を含めた包括的な制限がなされるに至りました。しかしながら、これまでに人類は旧日本軍731部隊による生物兵器の開発や実験的な使用およびテロリストの手による同兵器の使用という忌まわしい経験をしてきており、今後、戦争での大規模な使用が決してなされないように厳しく監視していかなくてはならないことは言うまでもありません。一方で、生命科学研究から得られた成果を人類の平和に活かすことはできないのでしょうか。

約40億年前に生命が誕生して以来、多様な生物が自らの種を保存するために、極めて精緻な「生命の原理」を創り上げてきました。生命科学の研究者は、この原理に基づいてミクロの細胞社会で繰り広げられる様々な現象に感嘆しつつ、研究成果を人々が健やかな生活を送ることができる社会の構築に還元すべく日々努力しています。私自身、生命科学研究に携わってきた中で、生物が「恒常性」や「秩序」を維持するために多くの「生命の原理」を構築してきたと考えるに至りました。この生物の営みは、人類が平和を維持することに例えることができるとの観点から、本稿ではいくつかの「生命の原理」を紹介し、それらから私たちが平和について学ぶべき点を考えてみたいと思います。

細胞の構造と働き

あらゆる生物の基本を成している単位は細胞です。細胞が多様な機能を果たすことができるのは、その内部が膜構造によって外界と区切られているからです。細胞は、いわばひとつの領土と言えます。それぞれの細胞は、自身の内部で様々な活動をしていますが、ヒトをはじめとする多細胞生物では、細胞同士でコミュニケーションをとっています。具体的には、細胞膜上にチャネルが存在し細胞間で物質のやり取りをしています。このような細胞の構造と働きは、人間社会ではそれぞれの国が領土をもち、様々な物資や情報を交換していることに例えることができるでしょう。ここで重要なことは、細胞がやみくもに相手と物質の交換をしているのではないということです。すなわち、コミュニケーションする相手の素性を正確に把握し、必要な時に必要なものを必要な量やり取りしているということです。人間社会で秩序を保つためには、コミュニケーションをとる相手方の文化、宗教、価値観などを十分理解した上で、また自身のこれらを相手に理解させた上で、必要な物資や情報を選別してやり取りすべきではないでしょうか。

タンパク質のネットワークとプロファイル

あらゆる細胞活動の直接の担い手はタンパク質という生体分子であり、その設計図がDNAから構成される遺伝子です。2003年に、生命科学の研究者にとって長年の夢であったヒトの全DNA情報の解読が完了しました。この成果により、驚くべきことに約60兆の細胞から構成されているヒトの遺伝子の数が約22,000であり、単細胞生物である大腸菌の遺伝子数の4倍にも満たないことが明らかになりました。このことから、生物の複雑さを決めているのはタンパク質の働きであることが認識され、その後のタンパク質研究が急速に進展しました。その結果、ほとんどすべてのタンパク質が、他のタンパク質と相互作用することで機能していることが明らかとなりました。私たち人間が社会の中で、多くの人々と関わりあうことで初めて自らの役割を演じることができるように、タンパク質も細胞社会の中で他のタンパク質とネットワークを構築することで働いているのです。このことは、イングランドの詩人John Donne の言葉 "No man is an island"を想い起こさせます。この言葉には「どんな人間の死も私には損失だ。私の人生は人間と関わっているのだから」という平和の精神が込められているように感じます。実際に、たったひとつのタンパク質間

相互作用の乱れにより細胞社会は破綻し、その結果疾病が発症することもあります。一方で、タンパク質のネットワークを支えている重要な原理は、それぞれのタンパク質は一生交際相手が限定されていて、あらかじめ自身に与えられた役割のみを演じ続けるというものです。すなわち、自身の分をわきまえて、あらかじめ決められた範囲の中で働き続けるのです。グローバル化した昨今の人間社会でのこのような行動は、時代の流れに逆行するととらえられるかもしれませんが、自身の領土と果たすべき役割を正しく認識した上で行動することが世界の秩序を保つために求められるのではないでしょうか。

また、個々のタンパク質の役割が流動的であることも明らかにされています。同じ細胞でも、その求めに応じてタンパク質の発現（存在）パターン（タンパク質のプロファイル）が刻々と変化することで、恒常性が維持されているのです。例えば、栄養状態が悪い環境にさらされた細胞は、自身のエネルギー消費を抑えるために必要なタンパク質を新たに合成することで飢餓状態に対応します。逆に、必要のない時に不要なタンパク質が発現すると、タンパク質間ネットワークが乱れるのと同様に、細胞機能に不具合が生じてしまいます。人間社会で平和を維持する際に必要な人材は、局面ごとに異なることが考えられます。平和運動に関わる人材が流動的であることで、解決が困難な局面に対応が可能となることもあるでしょう。例えば、Albert Einsteinをはじめとする多くの偉大な科学者が原子爆弾の開発や使用に反対し、平和運動を行った時期がありました。これは、戦争への核兵器使用の危機が高まり、これを阻止しなくてはならないとの世界中の人々の求めに応じた活動でした。また、実際にLinus Paulingはノーベル化学賞受賞後に平和運動を推進し、その功績によりノーベル平和賞を受賞しました。平和運動への参加は、個人個人の自発的な判断によるものですが、一人でも多くの人が自身の分を認識した上で常日頃から平和に対する意識をもつことが重要になるでしょう。

免疫システム

ヒトをはじめとする脊椎動物は、外敵から身を守る防御機構として免疫システムを獲得してきました。免疫系で鍵となる役割を演じているタンパク質は抗体です。抗体は、体内に侵入してきた外敵（細菌やウィルスなど）を抗原として認識して結合し、それらを排除する働きをもちます。生物が作り出す抗体のレパートリーは極めて多く、ヒトでは億単位の異なった外敵を認識する抗体を産生することができます。生物が常に無数の外敵にさらされる中で恒常性を維持することが求められてきたために、このような驚嘆すべきシステムが構築されたのでしょう。免疫システムから学ぶべきは、自身を取り巻く多くの他者を攻撃する能力ではなく、秩序を保つために多様な人のことを認識（理解）する能力を身につけることの重要性だと考えます。他者を正しく理解することは、異なる民族間にとどまらず、同じ民族内でも大切なことです。ヒトでも、抗体が誤って自身の細胞内に存在する生体分子を外敵とみなして排除してしまうことが原因で発症する自己免疫疾患が知られているのです。

細胞の守護神タンパク質

紫外線や化学物質などによって遺伝子が傷つくことで、正常な細胞ががん化することがあります。高等生物にはがんを抑制する働きを担うタンパク質がいくつか見つかっていますが、その代表格がp53というタンパク質です。p53は、遺伝子が傷ついた際に細胞の活動を一時停止させ、傷の修復を行います。また、修復しきれない傷のため細胞ががん化してしまった場合には、アポトーシスとよばれる細胞死を誘導することでがん細胞を排除します。p53は、平常時の細胞では眠っていますが、細胞ががん化などの危機に直面した緊急時になるとおもむろに立ち上がり、実に100種類以上のタンパク質を指揮することで任務を達成します。p53は、まさにカリスマ性をもった細胞の守護神といえるでしょう。過去、それぞれの時代の要請に応じて、カリスマ性をもった数々の運動家が現れ、世界平和に貢献してきました。今後も、人類が様々な危機に直面した時に、民族や人種を超えた支持が得られる平和運動家が現れて、人間社会の「恒常性」と「秩序」を維持してくれることを祈ってやみません。

おわりに

2012年度のノーベル医学・生理学賞を山中伸弥教授らが受賞しました。山中教授は、既に分化した細胞を初期化して、あらゆる臓器・組織に分化できるiPS細胞を作製する方法を開発されました。これと同様に世界中の紛争を初期化する方法を見つけることができれば、間違いなくノーベル平和賞を受賞できるでしょう。

Hans Belting, *Bild-Anthropologie: Entwürfe für eine Bildwissenschaft*, Wilhelm Fink Verlag, München, 2001

『イメージ人類学』ハンス・ベルティング著（仲間裕子訳）（平凡社　2013年刊）

『ヴィーナスを開く―裸体、夢、残酷』

ジョルジュ・ディディ=ユベルマン著（宮下志朗・森本庸介訳）（白水社　2002年7月刊）

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　**仲 間 裕 子**
（立命館大学産業社会学部教授）

美術史学は転換期を迎えて、すでに数十年たつ。これを推し進めたのは、まずはハンス・ベルティングである。ベルティングの『美術史の終焉？』（元木幸一訳、勁草書房 、1991年）が伝統的な美術史変革の基礎を造成したといっても過言ではない。狭隘な芸術内在的考察を乗り越えるとともに、西洋中心主義を軸に展開してきた美術史研究を批判した。こうしたベルティングの発信力はいまなお衰えを知らないようである。今年、開催された国際美術史学会における招聘講演（World Art versus Global Art. A new Challenge to Art History）も多くの聴衆者を集めた。彼の思想の根本は、推薦する『イメージ人類学』にもっとも‘具体的’かつ‘体系的’に窺い知ることができる。2001年の立命館大学国際言語文化研究所主催の講演でも、ベルティングはその鋭利な分析の一端を披露している。

美術史家の彼がなぜイメージの問いを提起するのかに対しては、「芸術作品は、それが絵画であれ、彫刻、版画であれ、歴史をもち、触れることのできる対象物であって、分類し、制作年代を決定し、展示可能なものである。他方、イメージはこのような物化の試みを拒み、多くの場合、物的存在と精神的存在の境界線をまたぐことにもなる。イメージは芸術作品のなかに住まうことがあるあるにしても、必ずしも芸術作品と合致するわけではない」からだと説明している。芸術作品はある一定の歴史的条件下で生成したイメージであって、まずはイメージ自体を問わなければならないのである。そこでベルティングは、メディア·イメージ·身体という3要素の布置の構造分析を、イメージ考察の出発点としている。まずは、イメージを人類の生み出す人工物として、イメージ行為に生産と受容を見、ともにその社会性を必然的契機とみなす（第1，2，3章）。こうした理論的装置と共にイメージのルーツに遡る（第6，7章）。さらに、このようなルーツから誕生したイメージの変遷の歴史を辿り、3要素の布置の歴史的変様を明示する(第4，5，8章)。彼のイメージ学は、社会的・人類学的観点と、実証的・歴史的観点を合わせ持つ総合的な理論の構築を目指しているのである。この理論は、カント的な哲学的人間学の普遍主義の誤りは避けるが、それでもイメージをあくまでも人間存在から察する。「カドゥヴェオ族の顔面彩画」「イェリコの髑髏」「蝋の奉納像」など、従来、美術史研究の範囲外であった対象を考察するのも、人類の歴史におけるイメージ行為の重要性に鑑みてのことである。ベルティングは、アビ·ヴァールブルクの人類学的観点を受け継ぐと告白している。

ジョルジュ・ディディ=ユベルマンもヴァールブルクの系譜に立ち、『残存するイメージ：アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』（人文書院、2005年）等を日本語訳で読むことができる。なかでも『ヴィーナスを開く』は彼の思想に触れることができる入門書といってもいい。古代ギリシア研究、ルネサンス研究の中心的なモチーフのひとつである愛と美の女神ヴィーナス（アフロディーテ）を、ディディ=ユベルマンは、《メディチのヴィーナス》に着目して、貞淑と恐怖の両観点から考察する。この医学用の蝋製解剖模型は当時の有名な蝋細工職人により美的鑑賞用としてもリアルに作製されていると同時に、その内臓や子宮を、詳細な部分まで「開いて」観ることができた。つまり、「官能と死」をわれわれに直視させるヴィーナスであった。

ベルティングの『イメージ人類学』においても、死が中心的なテーマとなる。彼によれば、死こそがわれわれにイメージの原義を教えるのである。先のイメージをめぐる3要素に関連して言えば、「身体とメディアは両者とも、葬儀において像（イメージ）が持つ意味に関わっている。つまり、死者の、欠けた身体として、死者の代わりに、像（イメージ）が据えられるからである。これらの像（イメージ）は、死者の空になった場所を占めるために、今度は、人工の身体を必要とする。こうした目的のために、*失われた身体*は、像（イメージ）の仮想の身体と交換される。イメージは、物質的（身体の）不在をイコン的現前へと変貌させることによって、可視化するのである。イメージのメディア性はこのように身体とのアナロジーにその起源をもっている」。

氾濫するイメージは、われわれの生活を支配し、ますます生身の身体や死から遠ざける。イメージを人類の生と死の観点から語るベルティングとディディ=ユベルマンの研究は、人類の歴史をその生の在り様から反省する平和ミュージアムの志向にも、根底において結びつくように思われる。

開催報告
(2012年7月～10月)

今号では2012年7月から10月の間に
開催したミニ企画展示をご紹介します。

第74回
夏休み企画「紙芝居」

2012年7月21日(土)～8月26日(日)

2011年夏、17点の国策紙芝居が当館へ寄贈されました。それは、終戦時に戦争協力の責任追及を避けるため廃棄対象となったものの、歴史の証拠にと個人が残したものでした。

日中戦争の頃、紙芝居は国の政策を宣伝して社会を統制する道具であり、戦争への協力を美化し、敵をなじるものが多数出版されました。

本展はこうした紙芝居に描かれた思想や、上演による宣伝の仕組みを紹介し、人々を戦争に駆り立てた時代について考えるため開催しました。

紙芝居の上演映像と手にとることができる複製品

夏休み企画「紙芝居」展示の様子

本展では、視覚と聴覚の双方に訴える紙芝居のメディア性や、素人が上演して国策の宣伝ができるよう裏書に記された読み方の指示などもわかりやすいように展示しました。展示制作は、博物館実習の舞台でもあり（詳しくは、本号12頁）、実習生は学芸員とともに資料と展示手法を検討し、あらすじをまとめたパネル制作や上映映像制作にあたりました。学生たちの奮闘もあり、来館者からは、見やすいと好評でした。

戦争の宣伝に使われた紙芝居は、70年の時を経て、学生たちの実地教育の役に立つことになりました。

第75回
「戦争と医の倫理～日本の医学者･医師の『15年戦争』への加担と責任」

2012年9月14日(金)～10月8日(月・祝)

これからの医学・医療の発展には、人間の尊厳や人権を基本とすることが何より重要です。そのためには、日本の医学者･医師がかつての戦争中におこなった「人体実験」などの非人道的行為を史実にそって検証し、その教訓を生かしていくことは欠かせません。

本展では、現在わかっている限りの事実を、パネルや旧日本軍「731部隊」にまつわる資料を通して紹介。日本の医学界・医療界における反省と謝罪、医の倫理に反する行為を今後二度としない決意の必要性を明らかにすることを目的とし、展示を行いました。

主催：「戦争と医の倫理」の検証を進める会

「戦争と医の倫理」展示の様子

博物館実習受け入れ

立命館大学国際平和ミュージアムでは、今年度も博物館実習生を受け入れました。期間は6月末より7月の平日、土日を含むものとなりました。

毎年の繰り返しとなりますが、博物館実習は、学芸員資格取得を希望する学生にとって「総まとめ」の科目です。各自が大学の資格課程科目で得た知識を、実習を通して理解し、さらに学びを深め、博物館の専門職員たる学芸員としてスタートが切れるだけの基本的な素養を身につけることが目的とされています。今年度の実習生は、本学文学部3名と映像学部4名、他大学は京都橘大学、京都造形芸術大学各1名の合計9名となり、それぞれ学んできた内容は様々だったようです。

今年度の実習生一同

実習指導の内容については、可能な限り文部科学省から出された「博物館実習ガイドライン」に沿う形で考えるよう努めますが、「いつでも必要な」ミュージアムの維持管理に欠くことのできない内容のものと、この時期でないとできない「旬」な内容のものを織り交ぜることにしています。

「いつでも必要な」実習内容としては、資料の保存環境の管理、収蔵庫内の清掃、温湿度計の校正、貸出資料の返却、受入資料の整理等、学芸業務が中心となりますが、副館長による講義や、広報、庶務、イベント業務といった館の運営業務にもふれていただき、国際平和ミュージアムの理念や設置目的等を包括的に理解できるようにしています。

「旬」な内容としては、第74回ミニ企画展示夏休み企画「紙芝居」（7月21日（土）～8月26日（日））実施にかかわる作業を取り入れました（詳しくは11頁）。

映像学部生（4名）の実習に関しては、前年に続き、学部で学んだ専門技術を活かす実習内容とするため、展示を効果的にみせるしかけ（＝紙芝居映像）の制作をしました。しかし、実習生全員で展示を「つくりあげる」過程に参加できるように、映像制作にあたる紙芝居の選定については、学芸員による展示企画の解説後、実習生9名全員が個々に展示候補となっている紙芝居資料の資料整理をし、それぞれの紙芝居についての内容を把握→発表→討論→選定としました。映像学部生が映像を撮影・編集している間、他の実習生は、展示解説パネルや、キャプション等の制作を進め、映像の編集確認等も行いました。

撮影の様子

展示開幕まで残り2日（7月19日）となってからは、実習生も、ミュージアムの学芸班も、大忙しです。釘を使ってパネルを貼り付ける作業ひとつにしても、パネルの位置や、並べ方を決め、誰がやっても同じ高さになるように、水糸をはらなければなりません。慣れない作業を実習生がそれぞれ活発に意見を交換しあい、進める姿がありました。

展示開幕初日は、展示室の中で、ミュージアム職員を前に、自分なりの工夫と努力した点について発表を行うなどして終了しました。終了後の意見交換の場でもそれぞれ満足のいく内容となっていたことがわかり、受け入れ側としても手応えを感じました。

2012年度博物館法改正で、今年度より学芸員資格を取得するために必要な単位数が増えました。資格がものを言う時代といわれる反面、学芸員資格取得者が学芸員として採用される門戸は、決して広いものではありませんが、実習生を受け入れる博物館として今後もできる限り協力していこうと思います。

設営の様子

（学芸員　岸本菜穂美）

小中学校教員対象下見見学会2012

開 催 日：2012年7月25日（水）、27日（金）
　　8月17日（金）、22日（水）、23日（木）、24日（金）
開催時間：13：00～15：00（120分）
参 加 者：17校　38名
内　　容：挨拶　加國尚志副館長（5分）
　　平和講義体験　安斎育郎名誉館長（7/27、8/17、8/22）（30分）
　　貸出教材キットの紹介　学芸員（7/25、8/23、8/24）（30分）
　　質疑応答（15分）
　　展示見学（地階30分　2階10分）
　　ボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフの解説あり
　　収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての利活用について（15分）
　　個別相談会（15分）
　　見学受付・平和講義やガイドブックの事前送付等、
　　各種サービスのご案内

当ミュージアムでは、戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を学校教育に携わる先生方とともに考え、ミュージアム見学につながる機会を持ちたいとの思いから、毎年7月、8月に主に小・中学校の先生方を対象とした下見見学会を実施しています。

ミュージアムの見学者の多くは、修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的で来館する小中学校の団体となっています。昨今の国際状況を考えた時に、こうした若い世代に戦争の悲惨さを語り継ぎ、地球環境・人権などを含む平和創造の取り組みを発信するという当ミュージアムの役割は非常に重要であると考えています。

平和講義の様子

今回も、より多くの先生方にご参加いただけるよう、夏休み中に複数日開催日程を設定し、教育現場における当ミュージアムの利活用を考えていただけるよう工夫しました。

今年は、初めての試みとして、学校の授業での利用を想定し、2012年度から貸出を開始した貸出教材キット(「現代(さいころくん)キット」と「15年戦争(慰問袋)キット」）の2種類の紹介を行い、先生方には現物を実際手に取ってご覧いただきました（上記ポスター参照)。

また、当日参加された先生方からは多くのご意見・ご感想をいただきました。これらの貴重なご意見を次年度の開催に役立てたいと考えています。

貸出教材キットの紹介

アンケートより一部抜粋

- 展示内容が良かったです。ガイドの方の説明も小学生用に丁寧にしてくださいました。（小学校）
- 小学生には、実物を見るということが大変有効ですので、それが確実に出来ると思いました。（小学校）
- 平和講義は短時間でしたが、ミュージアムが伝えようとされていることがよくわかりました。展示品も貴重な物で、現在の世界についてのメッセージが入っているのも良かったです。（中学校）

「へいわ」ってなに？？２０１２

～電気について考えてみよう!!～

日　　時：2012年7月26日（木）10：00～12：00
会　　場：立命館大学国際平和ミュージアム
　　ミュージアム会議室・特別展会場内
対　　象：小学生以上、保護者
参 加 者：25名
プログラム：120分
・安斎育郎名誉館長による平和のお話
・特別展「放射能と人類の未来」を体験しよう
・京(みやこ)エコロジーセンターの方と一緒に節電について考えよう
・まとめ・平和へのメッセージ
・参加証授与（モンテ・カセム館長）

国際平和ミュージアム恒例の夏休み親子企画。今年は、開催中の2012年度春季特別展「放射能と人類の未来」のテーマとも絡めて、昨年に引き続き「へいわってなに？？」をタイトルに平和の問題と同時に電気や節電方法について学習しました。

まず「平和のお話」として、安斎名誉館長に東日本大震災による原発の問題や現地の様子、また、今なお恵まれない地に生きる子どもたちの状況をお話しいただき、みんなで平和な世界を作っていくことの大切さを学びました。次に特別展「放射能と人類の未来」の会場へと移動し、特別展見学とともに、本学映像学部の大島登志一教授の指導のもと同学部制作・提供の「バーチャル原発ジオラマ」等を体験しました。その後、再び会議室に戻り、京エコロジーセンターの遠藤さん、澤田さんと一緒に、自宅における節電方法などをみんなで一緒に考えました。

そして最後にカセム館長より、この企画に参加した子どもたちに平和や自分たちの暮らしについて学んだことを証する夏休み親子企画の参加証が授与されました。その際館長は、この地球上の一人ひとりが互いに認め合うことで争いのない世界がつくれることを、みんなで手をとりあって子どもたちに訴えられました。

子どもたちのから寄せられた平和へのメッセージ

◎平和は大事だと思いました。平和はあたりまえだと思っていたけれど、食べものがなくて亡くなっている人もいるので、大事にしなくてはいけないと思った。
◎平和にはいろいろな意味があるということがわかりました。少しでも平和に近づくように努力していきたいと思います。
◎みんなが笑顔になれる国、みんなが努力できる国。僕たちの世代がやれることはたくさんありそうです。みんな、頑張ろうぜ。

参加した保護者の方々からの感想

◎昨年も参加させていただき、良かったので今回も参加させていただきました。プログラム、どれも良かったです。短い時間で、濃い内容でした。毎回「へいわ」について考えさせられます
◎参加型だったのが良かった。楽しめた。もっとたくさん聞きたくなりました。安斎先生、カセム先生のお話を、子どもと一緒に聞ける機会がまたほしいです。

特別展「放射能と人類の未来」の体験展示

カセム館長と一緒に

2012年度 大学コンソーシアム京都インターンシップ生を受け入れ

研修場所は昨年度に引き続き立命館大学国際平和ミュージアムです

立命館大学国際平和ミュージアムでは、学校法人立命館にてインターンシップを行うプログラムとして受け入れを行い、大学コンソーシアム京都からのインターンシップ生として、立命館大学と京都ノートルダム女子大学から各1名の受け入れを行いました。期間は8月1日から8月11日の間の計10日間でした。

インターンシップ生を受け入れるにあたり、獲得目標としては、国際平和ミュージアムの広報に関わって、効果的な宣伝広報のあり方をまとめることとしました。

インターンシップ受け入れの期間は夏休み前半の時期に設定しました。ミュージアムでは例年、平和のための戦争展が開催されている時期でもあり、毎年、たくさんの来館者が訪れる時期でもあります。

初日に、主に戦争展の来場者向けに、夏から秋に開催するミュージアムの取り組みをまとめて掲載したちらしを作成・配布しました。このちらしは戦争展開催期間中をとおして配布しました。

期間の後半は、対象者を大学生に絞り込み、国際平和ミュージアムを知らない学生に、どのように興味を持ってもらうか、国際平和ミュージアムの存在は知っているけれど、どんな内容の展示なのかわからない人に、手にとってもらえるちらしを作成することを主眼に取り組んで頂きました。ミュージアム関係者へのヒアリングを通して理解を深め、各自の個性を活かしてちらしを作成しました。

そのほかにも下見見学会の案内やシンポジウム広報先に関する調査など、業務を着実にこなしていました。

期間の最後には、作成したちらしの制作意図や表現方法を中心にプレゼンテーションを行いました。

ひとつひとつの業務を積極的にすすめ、自身の考えや特性を活かして真剣に取り組んでいました。このインターンシップで得たことを活かして今後の学生生活を送ってほしいと思います。

ちらし案の考案・作成中の風景

「平和って　なに色?」 文字・活字文化の日　特別企画

10月27日は「文字・活字文化の日」。2005年（平成17年）「文字・活字文化振興法」の施行により制定されました。文字・活字文化が人類の知識および知恵の継承や、豊かな人間性の涵養、健全な民主主義の発達に欠くことができないものであり、国民の間に広く文字・活字文化についての関心と理解を深めることを目的としたものです。

国際平和ミュージアムと白川静記念東洋文字文化研究所（白川研）とは、平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和って　なに色?　文字・活字文化の日　特別企画･一字で表す平和へのメッセージ」を、2012年10月27日（土）～11月3日（土・祝）に行いました。この催しでは、一字とその字にこめた平和へのメッセージを７色のカードに書いてもらいました。いかにも、というものから、一見意外な、しかし奥が深いなと思えるものまで、挙げられた文字は78種類。また同じ漢字でも、様々なイメージ・思いがこめられていました。今年の特徴としては、「絆」が第3位に入りました。小学校では習わない字ですが、東日本大震災以降注目されるようになったようです。

メッセージを書いてくださった方には、「平和ってなに色?」漢字カードを１枚ずつ差し上げました。これは、白川研が制作したもので、虹の七色等10種類の漢字について、古代文字やその成り立ち等を解説したものです。平和を願う心と漢字への興味をもつきっかけになればと願っています。

平和へのメッセージ

漢字カード

「一字で表す平和へのメッセージ」まとめ

総数　217のメッセージが寄せられました。

◆ランキングトップ5とコメント

①**笑**（22）…笑うということは、平和につながると思ったから。（小学生）
どんなに辛いことがあったり、苦しいことがあっても笑顔でいられたら、幸せ。（高校生）

②**愛**（18）…どんなにちがっていても人間は人間だから平和でいてほしい。愛しあってほしい。（小学生）
人々が「愛」の心を持っていれば、人を殺すことなどできないと思う。（小学生）

③**絆**（17）…平和はみんながゆずり合ったり助け合ったりしてできるものだから。（小学生）

幸（17）…日常のちょっとしたことにも幸せを感じられるようなことも、平和につながると思う。（高校生）

⑤**平**（９）…男女全員平等で平和な世の中になるように。（小学生）

命（９）…命一つ一つを考えると戦争なんてできるものではないと思う。それが平和に繋がっていくと思うから。（中学生）

トップ5外から

和　…「個」ではなく「和」（みんな）でいっしょにいきていこうというメッセージ。（小学生）
感　…感謝の感です。昔のおかげで今の世界があるのだと思った。（小学生）
安　…安心・安全・安定・平安。ふつうの生活がふつうに安心して送れるような世の中になる事をねがいます。（おとな）
一　…一言声をかければ楽しく遊べる、一言で仲良くできるということ。（小学生）
大　…小さな平和より大きな平和を（高校生）
痛　…痛みをこらえなければ平和は生まれない。（中学生）
暇　…暇というのは平和だからかんじられるのです。（中学生）

元アメリカ兵捕虜の見学と交流会

10月13日から21日、第二次世界大戦中の日本軍の捕虜となった元アメリカ兵7人とその家族計14人が日本政府の招きで来日されました。これは、2010年から始まった日本政府の招聘事業「日米草の根平和交流招聘プログラム：米国人元戦争捕虜招聘」による来日で、10月19日には元アメリカ兵捕虜（第二次世界大戦中に日本軍の捕虜）と家族との交流会（主催：戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会、協力：POW研究会、平和友の会）が、国際平和ミュージアムで開催されました。国際平和ミュージアムの見学、交流は、昨年に続き2回目になります。

国際平和ミュージアム見学後、ミュージアム会議室で行われた交流会に、学生・市民ら約70名が参加し、交流・対話を行いました。来日された方は、最高齢のランドール・エドワーズさん（95歳)をはじめ、ダグラス･ノータムさん（93歳）＜交流会は欠席＞、ジョージ・サマーズ・ジュニアさん（90歳)、デービッド・ファーカーさん（90歳)、ジョン・リロイ・ミムズさん（90歳)、ジョン・リアルさん（90歳)、ロバート・アーハートさん（89歳)の７人です。

今回、来日されたメンバーの多くはフィリピンで捕虜となり、何人かは「バターン死の行進」を体験、フィリピン内の収容所を転々とした後、日本や満洲（現･中国東北地方）に送られました。また､戦争末期､B29の搭乗員として東京空襲に加わり、撃墜されて捕虜となった体験を持つ方もおられ､一人一人から戦争･捕虜体験の証言をいただきました。

先に行われた当館の戦争の被害・加害の両側面からの展示についての感想を含め、日本軍の捕虜体験の証言から、戦後67年を経て、平和への思いを口々に語る元米兵の方々からの「平和を願う。もう憎しみはない。」と語る言葉に、「平和への思い」をともに共有できた交流会でした。

交流会の様子

第5回 広島平和記念資料館

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE
日本平和博物館会議（ロゴマーク）

設置の経緯

1945年（昭和20年）8月6日、広島は原子爆弾によって甚大な被害を受けました。戦後、復旧・復興に追われる中でも、被爆の痕跡を残す資料を探し集める人がいました。後に広島平和記念資料館初代館長となる長岡省吾氏です。長岡氏の集めた資料は、1949年（昭和24年）、中央公民館の一室に開設された原爆資料陳列室で展示されることになりました。資料は中央公民館近くに開設された原爆記念館で展示された後、1955年（昭和30年）に開館した広島平和記念資料館に引き継がれています。

広島市の復興は、1949年（昭和24年）に成立した広島平和記念都市建設法に後押しされる形で進みました。平和記念公園も当館も同法に基づく復興計画の一環です。当館の目的は広島平和記念資料館条例第1条に「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため」と定められています。

広島平和記念資料館

展示の構成

当館は本館・東館の二つの建物から成っています。本館は、1973年（昭和48年）から1975年（昭和50年）にかけてと1991年（平成3年）の二度、大きな改修を行い、展示も更新してきました。1994年（平成6年）には地上3階・地下1階建ての東館が開館しました。

東館から入場し、被爆前の広島の歴史と原爆開発から投下までの経緯を説明した1階、被爆からの復興を伝える2階、現代の核兵器の状況と核兵器廃絶や被爆体験継承の活動を紹介している3階の展示を見学した後、渡り廊下を渡って本館へと進みます。本館は、原爆によって亡くなった方の遺品を、エピソードを添えて展示する「遺品は語る」のコーナーの他、原爆によって発生した熱線・爆風・高熱火災・放射線による被害を示したコーナー、そして被爆した人びとに対する救援救護活動を紹介するコーナーから成っています。また、平和記念公園や原爆死没者慰霊碑を望むロビーには、「市民が描いた原爆の絵」や証言ビデオコーナー、そして著名な来館者の残した「平和へのメッセージ」を紹介したコーナーがあります。「対話ノート」と呼んでいる感想ノートがロビーに置かれ、多くの人が、感じたことや思い、願いをつづっています。

東館の地下には3つの展示室があり、企画展や新着資料展などを開催するほか、「市民が描いた原爆の絵」を展示しています。情報資料室で図書の閲覧ができるほか、ホールや会議室では被爆者による講話が行われ、修学旅行生をはじめ多くの人が被爆体験に耳を傾けます。

また、長崎市と連携して国内外で原爆展を開催するほか、個人や団体に写真パネル・ポスター・映像作品等の平和学習用資料の貸出しも行っています。

本館風景

全面リニューアル

現在、当館では、2018年度（平成30年度）のオープンを目指して、施設の改修を伴う展示の全面リニューアルを進めています。これまでとは見学順路が異なります。リニューアル後は、東館から入館して導入展示を見学した後にまず本館へ進み、広島の被爆状況と遺品等を、時間をかけて見学することになります。本館の見学後は、ふたたび東館へと戻り、核兵器の開発の歴史や現在の状況を学んだ後、広島市の復興の歩み、核兵器の廃絶を目指すさまざまな取組みを見学して出口へと向かいます。被爆の実相を分かりやすく伝えるため、これまで以上に人への被害とそれを示す被爆資料を重視した展示とすることとしています。

一部閉館の時期等、展示更新に伴う各種情報は、適宜ホームページ等でお知らせします。

基本情報
◆住所　730-0811　広島市中区中島町1-2
◆電話　082-241-4004／ファクス 082-542-7941
◆e-mail　hpcf@pcf.city.hiroshima.jp
◆ホームページ　http://www.pcf.city.hiroshima.jp/
◆入館料　大人50円　小中高生30円
◆休館日　年末年始（12月29日～1月1日）
◆開館時間　3～11月　8:30～18:00（8月は19:00閉館）
12～2月　8:30～17:00
※入館は閉館時刻30分前まで

５年間のガイド活動を振り返って

立命館大学国際平和ミュージアム
ボランティアガイド・平和友の会　伊 藤　昭

■印象に残った感想の言葉

①小学校6年生の女子児童
「こんな日本　おかしいわ！！」
・イラク政府発表：戦争で死亡した国民は5年で15万人…戦争で大変
・日本警察庁発表：自殺者は3万人が14年続き43万人…平和で豊か
⇒これで良いのでしょうか？との問いかけに“気付きの返答”

②専門学校で日本語を勉強中の韓国男子青年
「今日はここへ来てよかった」

③チャレンジ体験の中学の男子生徒
「自分一人で見て回ったが、ガイドさんの説明を聞いて、ミュージアムが全く違ったものに見えました」

■ボランティアガイド養成講座終了後に心がけたこと

①ビデオを観ながら安斎館長の解説を聞き、解説文を考えたこと。
②展示物を徹底的に観て、読み込み、考えたこと。
③開催される展示や講座に可能な限り参加し、考えたこと。
④先輩ガイドを見習いながら、ポイントガイドのテーマを少しずつ増やし、小グループのスルーガイドを分担して自分らしいやり方を考えたこと。
現在は、2階の学生スタッフが不在の時は、2階のガイドもしますし、時間に余裕のあるグループの場合、玄関両脇の世界遺産ゆかりのバラや、1階資料室のガイドも行います。

■ガイドの遣りがいを感じるとき

①対話形式でガイドが出来たとき。
②スルーガイドで、グループの構成・問題意識・事前学習の準備等が少しでも掴めて、対応するガイドが出来たとき。
③何よりも気付きの一言や、励みになるような感想を聞けたとき。

■勝手にとはいえ多忙な中で今日まで続けられたのはなぜなのか？

①平和友の会に入会し、月1度のガイド部会に参加し、たくさんの学習会の機会を与えられたこと、又、ガイド終了後の短くも有効な意見交換の場があったことが、ガイドの力量向上や対応の仕方にとって大変役に立ち、継続の励ましになっていたと思います。
②立命館大学のボランティアコーディネーター養成講座（毎週1回18時から21時10分を1年間）の科目等履修生となり、インターンシップ先を立命館大学国際平和ミュージアムで許可されて、約1カ月の実習の中で「改革提案」を纏めたことも思い入れを強くできました。
③ポイントガイドの分担を自負している「現代の紛争」は、地階の最後のエリアですので、多岐にわたる内容ばかりではなく、時間がないか、疲れてきてサッサと通過する生徒が多いのが実態ですが、そこで短時間（目処は3分）で、展示内容と自分の今のこととを結び付けて気付いて貰うことは至難の業です。その為には、毎日、日刊紙3紙から戦争と平和、その背景・遠因に繋がる些細な記事から敏感に情報として咀嚼しておく必要があります。そのおかげで、新聞を広げたら、自分のアンテナがサッと立って、頭がクリヤーになる感じがするというすばらしい贈り物を得たように思います。

■印象に残った感想の言葉－①　後日談

私は、コンソーシアム京都での学びを３年間続けています。本年度前期の「比較教育学入門」で知り合った女子学生（将来は教諭を希望）に、授業終了後、“ガイドで忘れられない子供の気付きの言葉”をメールしました。

女子学生は、「日本の自殺」について調べ、「日本は異常事態にある」ことを始めて知り、驚くと共に、何の屈託もなく「こんな日本おかしいわ！！」と気付いた子供達がいて、素直に成長させたいと決意し、考えさせられるメールを送られたことに、感謝の言葉を寄せられました。良い先生になって、子供達をこのミュージアムに引率してきてほしいと願わずにはおれませんでした。

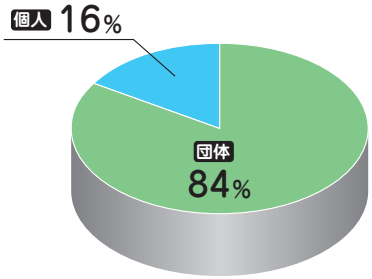
最後に、震災危機、財政危機に加えて核力危機と沈下ないし後退の兆しがある世情の中に、一層平和への圧力が感じられる今日、このミュージアムの役割・期待が高まっていると思います。そうであるからこそ、これからも「気付きの言葉」を引き出すべくボランティアガイドを続けていきたいと強く思う今日この頃です。

2012年4月 ～2012年10月 入館者状況

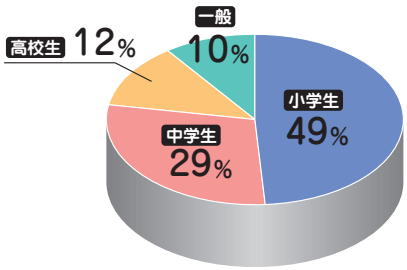
◎開館日数　176日

◎オープン後入館者数累計　828,145名

＜有料団体・個人入館者状況＞



＜有料団体入館者数状況＞



2012年度 月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	人数計(名)
総入館者数	2,286	6,336	4,901	2,907	2,441	3,000	12,258	34,129

来館80万人	2012年5月22日、来館者80万人	
特別展	春季特別展　『放射能と人類の未来』会期：5/15～7/27	9,691
	特　別　展　『世界報道写真展2012 ―WORLD PRESS PHOTO 2012―』	
	京　　都（立命館大学衣笠キャンパス）会期：9/19～10/14	6,632
	滋　　賀（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）会期：10/16～11/1	2,303
	秋季特別展　『未完の作品／永遠のはじまり―「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える』会期：10/23～12/1（10/23～10/31）	4,635
	小　計	23,261
特別展示	華道家元池坊×立命館大学国際平和ミュージアム特別展示"平和の祈りを生ける"	
	［広島会場］（広島県民文化センター）　第58回広島平和美術展に出展　（8/2～8/7）	オープン
	［東京会場］（東京ドームシティ　プリズムホール）　第20回8・15国際平和美術展に出展　（10/7～10/9）	オープン
特別協力	「写真報告3・11赤浜」撮影 菊地公夫（国際平和ミュージアム　1階ロビー）　（9/15～10/12）	オープン
講演会ほか	立命館大学国際平和ミュージアム20周年記念式典　（国際平和ミュージアム　1階ロビー）　（5/19）	218
	来館80万人記念セレモニー（奈良市立富雄第三中学校2年生　69名）　（5/22）	
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会　（衣笠キャンパス　創思館カンファレンスルーム）　（6/10）	184
	安斎育郎名誉館長『放射能リテラシーのすすめ』	
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会　（衣笠キャンパス　充光館301号教室）　（7/14）	78
	豊田直巳（フォトジャーナリスト）『イラクからフクシマへ～放射能汚染地帯を歩いて』	
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？2012　（国際平和ミュージアム　2階会議室）　（7/26）	26
	下見見学会　（6日間・7/25、7/27、8/17、8/22、8/23、8/24）	38
	世界報道写真展オープニングコンサート　（国際平和ミュージアム　1階ロビー）　（9/19）	65
	ＮＯＵＮ ＹＡ（ヌン･ヤ）フルート（ナイサム・ジャラル）・ウード（ヤン・ピタール）のユニット	
	「世界報道写真展2012」公開記念講演会	
	恒成利幸氏（朝日新聞社）『東日本大震災～そして現在　そこから見えること、考えなければならないこと』	
	［京都会場］衣笠キャンパス 以学館4号教室　（10/9）	184
	［滋賀会場］びわこ・くさつキャンパス　エポック立命21ロビー　（10/16　1日2回実施）	84
	小　計	877

編集後記

この後記を書いているのは11月で、京都の秋も少しずつ深まり、紅葉が美しくなりつつある頃です。京都に多くの観光客が訪れる季節で、名刹が多い国際平和ミュージアムの周辺も名所を訪れる人々でにぎやかになってきています。

しかし、以前は多く見かけられた中国からの観光客の団体がめっきりと少なくなったような気がします。バスの中でにぎやかに話をしながら金閣寺や龍安寺の観光を楽しんでいた人たちの姿がないと、やはりさびしいものです。外国の方に美しい自然や世界遺産を楽しんでもらって日本の素晴らしさに気づいていただけるはずの観光旅行も、政府が平和を築くために努力することを前提としていることに気づかされます。

尖閣諸島の問題について、国際平和ミュージアムでは館長・名誉館長名でメッセージを発信しました。詳しくはミュージアムのホームページでご覧いただきたいのですが、そのメッセージでは、友好関係が損なわれることのないように平和的な解決へ向けて政府が努力することを訴えています。平和や友好関係の大切さは、日常にまぎれて、つい忘れてしまいがちです。しかし、失われてしまってから気づくのでは、遅すぎます。たとえ小さくても、平和の大切さを訴える声を挙げること。平和を求める声を大きなものにするためには、まずそこから始めなくてはなりません。国際平和ミュージアムでは、今後も、平和のために必要な場合にはメッセージを発信し続けていきたいと考えています。

加國尚志

※　本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展示室

第76回ミニ企画展示

●「第6回立命館附属校 平和教育実践展示」開催中

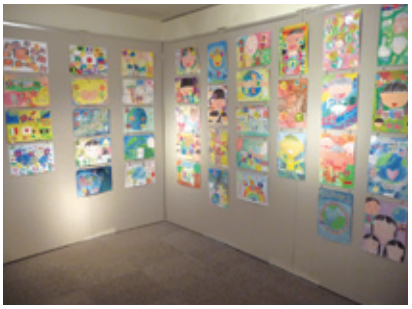
会　　期：2012年10月14日(日)～12月21日(金)
　　12月9日(日)～12月21日(金)　立命館慶祥中学校・高等学校（北海道江別市）

展示内容

本企画は、初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。国際平和ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の来館者の方々に、改めて平和を考えていただける機会になればという思いで開催しています。

以下は全て終了いたしました。

10月14日(日)～10月26日(金)　立命館中学校・高等学校（京都市）
10月28日(日)～11月 9日(金)　立命館宇治中学校・高等学校（宇治市）
11月11日(日)～11月22日(木)　立命館小学校（京都市）
11月25日(日)～12月 7日(金)　立命館守山中学校・高等学校（滋賀県守山市）



2012 年度立命館小学校の展示の様子
「４年生による平和ポスター」

第77回ミニ企画展示

●「ウラジオストクにおける日露民衆交流の歴史と現在－『シベリア出兵』との関わりも含めて－」

会期：2013年1月12日(土)～2月3日(日)
主催：日本･ウラジオストク協会

大学生制帽と腕章
(「京都青春時代－学生と戦争の風景－」)

第78回ミニ企画展示

●第18回京都ミュージアムロード参加企画「京都青春時代－学生と戦争の風景－」

会期：2013年2月9日(土)～3月24日(日)
主催：メディア資料室 学生ミュージアムスタッフ、立命館大学国際平和ミュージアム、京都市内博物館施設連絡協議会、京都市教育委員会

第8回ボランティアガイド養成講座受講生募集(予定)

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、今日までに82万人をこえる来館者を迎え、5,000校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示開設を中心に、展示物が語るエピソード、背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。戦後67年が経過した現在、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと思っております。

そこでボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ることを目的とした養成講座を開催いたします。

講座内容は、立命館大学国際平和ミュージアムを設立した趣意、「平和」の意義、展示に関する概要把握（一五年戦争・現代の戦争)、暴力と平和について、ガイドとしての接遇マナー、実習等です。

身近なことからできる社会貢献。ぜひ積極的にご参加ください。

開催日程（予定）：2013/2/17(日)、2/23(土)、3/2(土)、3/9(土)、3/16(土)、3/17(日)
　　2/17(日)、2/23(土)は1日かけて講習を行います。3月は各回とも3～4時間(約半日)の講座です。

※2013年4月～7月は、養成講座修了生を対象に実地研修も行います。詳細は国際平和ミュージアムのホームページにてご確認ください。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第20巻第2号（通巻57号）　2012年12月7日発行

立命館大学
国際平和ミュージアムだより
編集・発行
立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151　FAX. 075-465-7899
http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html